



プロフィール

昭和50年東京大学経済学部卒業後、通商産業省入省、米国スタンフォード大学研究所研究員、産業政策局企画調査官、大臣官房企画調査官等を経て、平成4年6月より現職・モットーは「自然体」・趣味はピアノ、エレクツォンの演奏(クラシックからジャズまで)と執筆・血液型AB。

この人と30分

ぶらり訪問⑦



キーワードは複合化

通商産業省生活産業局

おお た ふ さ え

住宅産業課長 太田房江氏

訪問インタビュー第七回は、通産省太田住宅産業課長。去る六月中旬、公務ご多忙の執務室をぶらり訪問。

「住」を良くする

Q、現在の住宅産業の現状をどうお考えか?

一億総中流時代と言われながら、衣食満ち足りて、住だけ三流。両者間の大きな格差は否定できません。経済成長の成果が個人生活で実感できない。これは「労働時間」と「住」に大きく関わりがあると考えています。

こと「住」に関しては、工場で作るプレハブ住宅は、工場生産段階は通産省の、施工段階は建設省の管理でと相互に連携し、九〇年代の「住」を良くすることに応分の努力をしたと思います。

WISH21

Q、当面の通産省の施策は?

最近の重要課題は、住宅においても切口は省エネと環境。高機能、高規格コンセプトにこれらを取り込んでゆく。具体的には住宅用太陽光発電システムなどの普及です。

また平成元年度から七年間で住まい手ニーズに対応した住宅を開発しようとして「二一世紀住宅開発プロジェクト(WISH21)」を官民一体で進めています。研究テーマは三一。実際の研究は民間の住宅メーカーや住設機器メーカー等で構成される技術研究組合で行っています。ここで開発された技術をうまく普及させることにより、商業ベースの生産に結び付けてゆくことが当面の課題です。

まだフロンティアが

Q、住宅産業の可能性は?

これまで関わった自動車、鉄鋼など我が国の代表的な製造業にくらべると住宅産業はまだ歴史も新しく、まだまだフロンティアが残っているなあ、というのが実感。標準化を取っても、多くの改善の余地がありまして、高機能、高規格が叫ばれるわりには研究開発に割く経費が少ないように感じます。

国内はもとより、中国など周辺諸国が住宅難に喘いでいる現状をみても、市場拡大の可能性は非常に高い。研究開発、特に応用研究を懸命に進める中に需要喚起のカギがあると思っています。

人材と資材のコンビネーション

Q、木材業界に向けてひとこと。

様々な新素材が次々と開発される中、これからは全部木材で、ということとは難しいかもしれません。しかし、見渡す限り新素材では味気ないどこかに木が組み込まれている住宅は人に落ち着きを与えるし、いい意味でのゆとりにつながります。

通産省は異業種交流の場づくりが得意ですが、いろんな業種が集まって、他の資材との調和を考えた新しい需要を開発してゆくことが大切ではないでしょうか。住宅メーカーが消費者に提示するメニューの中にも、うまく木を組み込める新しいシステムを追及してほしいと思います。工業化住宅業界と木材業界の方々が、お互いに良い競争相手であると共に強力なパートナーという方向に進むといいですね。

キーワードは、人材と資材のコンビネーション、複合化ではないでしょうか。

新技術の開発を目指し、常に新しい発想、知恵で住宅産業界と関わってゆきたいというのが通産省の基本的な考え方です。(文責 編集室)